

別添資料 2

ドナウイヴァーロシュ工科大学における環境技術者人材育成プロジェクト
中間評価調査団（2003年1月15日～1月24日） 評価ヒアリング記録

木村書記官との打合せ

日時：1月16日 10:30～

場所：在ハンガリー日本大使館

出席者：

（大使館）松本和朗特命全権大使、木村祥治二等書記官

（JICA）調査団員一同、高嶋所長、木村新所長、大内専門家

会議要旨：

（谷川）本プロジェクトに至るまでの対ハンガリー環境協力の歴史（Kiss 学長の日本留学、田森専門家派遣、資環研・NEDO との共同研究、短期専門家派遣、C/P 研修受入、事前調査など）と今回の調査の目的を説明。ハンガリー側のオーナーシップに期待。

（木村）大使館にとっても重要なプロジェクト。3名の長期専門家は経験豊かで安定したプロジェクトとの印象。Kiss 学長のリーダーシップが大きいので、同学長の退陣後が課題となる。ドナウイヴァーロシュはドナフェル社の城下町という特殊な地域。副目標である環境ネットワークの構築という観点からは今一歩か。ハンガリーでは環境問題の重要性高く、大使館からも3名の専門家にはいろいろなお願いをしている。講義依頼などにも快く応じていただき感謝。

（谷川）この、副目標の部分をプラスのインパクト的に大いに評価したい。

松本大使との面談

（谷川）本プロジェクトに至るまでの対ハンガリー環境協力の歴史（Kiss 学長の日本留学、田森専門家派遣、資環研・NEDO との共同研究、短期専門家派遣、C/P 研修受入、事前調査など）と今回の調査の目的を説明。20日にステアリングコミッティ、22日にサインする予定。環境協力は範囲が広く、ハンガリー側のレベルも高い。専門家の努力大。環境協力の評価難しいが、Kiss 学長のリーダーシップもあり、現在までは順調に進捗していると理解。自立発展性に留意したハンガリー側の主体性が重要。

（松本大使）現在の日本の ODA の状況は？

（谷川）来年度の ODA 予算は全体で5.8%の減。JICA 予算は3.6%の減となる見込み。

対中・東欧はより大きなカット。しかし、本プロジェクトへの影響は大きくない。

(水口) 対中・東欧援助検討会の経緯と結果を説明。

(松本) 検討会の時期が遅かったのでは？ 日本国民に対して、ハンガリーのような豊かな国に対する援助の必要性を説明できるか？

(谷川) 韓国、中国、シンガポールにも共通する問題。一方でグローバルイシューに対応する必要性もある。

(水口) 近い将来は、ODA から交流型の 2 国間協力へ。

(大内) ハンガリーの生活レベルは豊か。地震がほとんどなく、建築物を永く保存できるという大きな資源持つ。LDC とは異なり、ODA の対象ではない。環境問題は限界に来ているわけではない。比較的緩やかな対応がとられている。現在の環境をどのように保護するか、環境モラルの低下、カルチャーポリューション(マスプロダクションによる意識の低下など) が課題。ドナウイヴァーロシュ市では環境に対する意識改革が必要。

(松本大使) ODA を行う側にモラルハザードが起きないか心配。実際援助が今うち切られてもハンガリー側に痛みは少なく、また覚悟もしている。カナダはすでに「新しいパートナーシップのあり方」についてハンガリー側と合意を結んでいる(木村書記官が関連資料を保有)。

(高嶋) JOCV などは交流型の色が濃い。

(松本大使) 援助と文化交流は峻別したい。

プレ・ステアリングコミッティ

日時：1月16日 14：15～

場所：ハンガリー教育省

出席者：

(ハンガリー側) Dr. Kiss 学長、Dr. Mang Bela (教育省次官補)、Dr. Agg (教育省)、Dr. Vago (交通経済省)、Ms. Szovenyi (環境省)、Mr. Jenei

(日本側) 調査団員一同、木村書記官、高嶋所長、木村新所長、大内専門家

会議要旨：

(Kiss 学長) 歓迎と感謝の意。参加者紹介。これまでのプロジェクトの経緯説明。

(谷川) 中間評価が目的。今回の関係者の方々のアレンジに感謝。プロジェクトは Kiss 学長のバックアップのもと順調と聞く。本プロジェクトは Kiss 学長が東大に留学されてから 20 年来的背景を持つ。NEDO、AIST における共同研究や、田森専門家派遣、事前調査など。現在プロジェクトは満一年が経過した。これまでの成果の発現状況の確認、PDM の見直しを行いたい。また評価は日・ハ合同によるものである。この評価結果を今後の活動計画に活かしたい。このプ

プロジェクトはいくつかの省庁が深く関与しており、それら省庁の協力が成功の鍵となる。またプロジェクト終了後の自立発展性にも現段階から留意していきたい。

(Dr. Mang Bela) プロジェクトのコンセプトに賛同している。特に公害対策は EU 加盟にとって重要な課題。また大学教育にとって外国との国際交流も重要である。ハンガリーでもヨーロッパを中心に留学が盛んである。現在の省の仕事はヨーロッパスタンダードでの教育レベルの整備である。EU 加盟後は大きな Competition になることが予想され、準備が必要。今回のプロジェクトが貢献できる部分でもある。現在高等教育においては 3 8 万 1 千人の学生、5 万 5 千人の教員がいる。今後はリアシステム (英国式の教育システム。カレッジと大学のシステム?) を導入。今後の教育では質を重視するか量を重視するか現在議論の真っ最中である。プロジェクトの成功祈る。(同氏退室)

(水口) ミニッツで (協議の上) 合意したい内容に関して説明。

(谷川) Dr. Mang Bela はステアリングコミッティの議長になるのか?

(Kiss 学長) そうはならないだろう。

(Ms. Szovenyi) 現在の環境省が抱える 3 つの重点分野は以下の通り。①廃棄物処理の問題。如何に減らすか。また如何にリサイクルするか。現在埋め立て式の処理。②下水道整備。上水道では 9 0 % の普及率も、下水は 4 0 % のみ。③大気汚染。特に車などの Transportation から来る大気汚染が課題。

(谷川) 環境省の政策文書などがあれば、JICA 事務所を通じて後日でも結構なので資料を頂きたい。

(高嶋所長) 評価の指標をより具体化できれば良いと思う。

(Ms. Szovenyi) このプロジェクトは最終的に環境技術者の育成を目指すプロジェクト。そのための基礎として大学教育の質の向上を目的としていると理解している。

(大内) 今後のプロジェクトの活動重点分野としては、2 年目には供与した機材の習熟を図ると共に、主に産業環境問題における調査に力を入れ、最終処分場までのプロセス、中小企業などが抱える問題の視察を C/P とともに行う予定である。その際には経済・交通省の協力を求めたい。また、3 年目は教育の質の向上について、教育省と協議をしたい。

(木村書記官) ドナフェル社からステアリングコミッティに参加者を呼べないのか?

(Kiss 学長) ドナフェル社は経営的に難しい状況にあり、難しいだろう。

REC との意見交換

日時：1 月 1 6 日 1 6 : 4 5 ~

場所：中・東欧地域環境センター（REC）

出席者：

（REC 側）Mr. Popovski 事務局長（元マケドニアの環境大臣）、山崎専門家（副事務局長）

（日本側）調査団員一同、木村書記官、高嶋所長、木村新所長、大内専門家

会議要旨：

（Mr. Popovski）REC の事業概要説明。公的利益に資する環境保護の国際機関。協力対象は政府だけでなく、NGO など民間社会に対しても。現在 15 ケ国が協力対象。近い将来トルコ（マールタ、キプロス）にも拡大。1990 年に当時のブッシュ米大統領に肝煎りで、米、EU、日、ハンガリーの協力で設立。現在スタッフが 180 名。15 ケ国に Country Office。9 つのプログラムエリアを持つ（1. キャパシティビルディング、2. 環境情報の提供、3. NGO サポート、4. 政策支援、5. 自治体支援、6. ビジネスと環境、7. 市民の参加、8. 気候変動問題、9. 環境法 規制）。REC の予算は全体的に拡大している。2002 年は 1200 万ユーロの拠出金、900 万ユーロの支出。代表的な活動では、ポーランドでのグリーンパック（教育用教材の配布）、南東欧諸国環境情報システムのアクションプラン、175 万ユーロの NGO グラント。南東欧諸国有害廃棄物処理ネットワーク。

（山崎）日本基金の予算の縮小。JICA 事業との連携は可能か？

（水口）日本からの拠出は日本基金で一元化されている。直接の資金提供はできない。周辺諸国における JICA 事業の受託者として連携は可能。

所感：REC は環境技術そのものよりも情報・ネットワークに強い組織という印象。調査を行う場合も外部委託を行う。JICA と現地の NGO などを結びつける橋渡し役や、コンサルタントを比較的安価で活用するノウハウなどが有益か。

専門家活動報告

日時：1月17日 9：50～10：30

場所：ドナウイヴァーロシュ工科大学新校舎

出席者：

（専門家）大内、水田、久新

（日本側）調査団員一同

会議要旨：

(大内) 1 年間の活動の報告。①教員の育成は長・短専門家により順調に進行中。②カリキュラムはメインコースの発足に合わせ現在検討中。本格的には 3 年目、C/P の自主性を尊重したい。③機材供与の準備はほぼ終了。教材は資環研のものを活用。④ドナフェル社や自治体の施設など視察も C/P と共同で実施。⑤セミナー、ワークショップ多数開催。ステアリングコミッティは今回が第 2 回目。

(谷川) Dr. Mang Bela はステアリングコミッティのメンバーからははづれる。

Kiss 学長インタビュー

日時：1 月 17 日 10 : 45 ~ 12 : 45

出席者：

(大学側) Kiss 学長

(日本側) 調査団員一同

会議要旨：

(Kiss 学長と以下に関し協議)

1 . 現状説明

(Kiss) PDM の改訂については調査団の案に関し特に問題なし。PDM1 の成果 1 ~ 3 は順調に進んでいる。環境管理の分野の手法や機材が整いつつある。教育機材はさまざまな研修に活用している。カリキュラムは流動的であり常に変化するもの。ハンガリーの大学カリキュラム認定機関 (Accreditation Committee) は学術的志向だが、ドエ科大は実践的志向。2003 年 9 月の新学期からのメインコース発足を予定。教材は C/P が主体的に作成するもの。これは簡単にはいかず、プロジェクトの最後までかかるだろう。現在学生に配布しているのは 200 ページの資料(環境工学だけではない包括的資料集)。部分的に専門家の貢献もある。環境工学メインコースは、化学、生物なども含め包括的な内容になる。現在のサブコースとは教育時間も内容の充実度も異なる。

サブコース：履修時間 460 時間。専門課程は 30 %。

メインコース：1000 時間の専門講義。2000 時間の教授とのコンタクト時間 (?)。180 単位必要。1 単位約 30 時間 (教授とのコンタクト時間、自習も含む)。専門課程 70 %。

環境工学コースの卒業生は去年が 1 名。今年は今週金曜日に 3 名が卒業試験を受ける。来年は 10 数人に増えるだろう。これからは環境技術者とともに環境機材技術者も求められる。

副目標に関しては、成果 1 のセミナーの開催については予想以上に積極的な活動ができた。科学の日のセミナーには 70 名、オープンキャンパスセミナーでは 30 名の市民が参加し、C/P の講義・講演を行った。今後も積極的に実施。セミナーのターゲットをより明確にすれば多くの参

加者を得られるだろう。一般市民に対するプロジェクトの貢献は、日本人専門家を中心とした活動による啓発活動と意識の向上にある。新聞・テレビなどにもたびたび取り上げられ、プロジェクトの PR 効果も。成果 2 の連絡会議については毎週水曜日の 4 時から 2 時間程度 C/P 全員が集合するディスカッションを行っている。

2 . ステアリングコミッティ (SC) について

(谷川) 頻度、回数をもう少し増やすべきでは？ また議長をどうするか？

(Kiss) Dr. Mang Bela ではなく Dr. Agg に。SC の役割は Advisory 機関。プロジェクトチームで戦略は考え、SC で承認・アドバイスをするといった形に。ドナフェル社にも広く見識を持った人物がいるが、経営者レベルでなかなか参加は難しいだろう。過去 1 年では SC が遅れ遅れになり、結局調査団に合わせることに。

(谷川) 今後は最低限年 1 回の開催を。(国の政策レベルからの) アドバイザとして。

3 . ドナフェル社 (関連会社含む総称として) と市の関係

(Kiss) 現在同社には 1 1 0 0 0 人の市民が勤務。関係する仕事でさらに 1 0 0 0 0 人。市周辺を含む約 1 0 万人の生活を支える企業。3 年前までは黒字も、以後赤字へ。今年の売り上げは 3 0 0 0 億フォリント (約 1 5 0 0 億円)、赤字が 1 4 0 億フォリント (約 7 0 億円)。コークスの生産量が約半分になったことが赤字の原因の 3 分の 1。実は 3 月までに 9 0 0 人が解雇、2 年以内に 3、4 千人が解雇されるという噂も。並行して、環境保護に対する市民の意識も低下しつつある。市役所からの C/P である Ms. Petrovickij のみが市民団体 "Environmental and Tourism committee" のなかで環境専門の経歴をもつ。

(谷川) ドナフェル社の状況と市民の意識の低下はプロジェクトに影響する重要な問題。

(田森) ドナフェル社での研修は、C/P に対してか、学生に対してか？

(Kiss) どちらの研修 (見学 ?) を行っている。

4 . ISO14001 の取得について

(Kiss) ISO9001 は 2 0 0 3 年 3 月に取得する見込み。2 0 0 2 年 1 1 月に既に準備状況調査が入っている。9001 取得の意味は、企業に対する教育に付加価値が増すこと。すでに 3、4 の大学は取得済み。今後は 14001 の取得にも取り組みたい。この取得は EU 加盟後とくに大学の重要性・付加価値を増すものである。現在ハンガリーの大学で取得したところはない。

5 . EU 加盟後の大学の役割

(Kiss) 学生の英語力が弱く、EU の他の諸国に留学するものは多くないだろう。また外国からの留学生も今のところ多くはない。しかしこれからは EU 基準に見合う教育を目指したい。

6 . C/P の流出の可能性と自立発展性など

(Kiss) 一時的留学はあり得るが、それでもまたドエ科大に戻ってくるだろう。良いカリキュラ

ム、良い教員、良い教育設備（機材）が整えば学生数、予算も増す。プロジェクトは終了後の自立発展性にも有効な活動を行っている。自分は2004年8月で学長職の任期満了となる。その後は学部の教授に戻る。

（谷川）学長交代による教育政策変更はないか？

（Kiss）ない。現在も自分の意志のみでプロジェクトが支持されているわけではない。学生数も増えることが見込まれる。ド工科大は国立大。予算の70%は国から、30%は自己収入による。全体予算は20億フォリント。

カウンターパートインタビュー

日時：1月17日 9：50～10：30

場所：ドナウイヴァーロシュ工科大学新校舎

出席者：（カウンターパートの役職名はミニッツに記載）

（大学 C/P）Mr. Jenei, Mr. Horvath, Ms. Farkas, Ms. Havellant, Ms. Kovacs-Bokor

（市役所 C/P）Ms. Petrovickij

（ドナフェル社 C/P）Dr. Kovats

（日本側）調査団員一同

会議要旨：

（PDM1の6つの成果に基づき、全員を対象にインタビューを実施した）

成果1（環境工学メインコースの講師育成）について

特に2002年9月～12月の1学期は大学 C/P は講義が多忙（週に20～30コマの講義、1コマ45分間）であり、各専門分野における日本人専門家からの技術移転は随時時間を見つけて行っている状況だが、毎週水曜日に2時間程度カウンターパート全員が集合するミーティングは継続的に実施している。この会合では専門家からの講義、ビデオプレゼンテーションなどや、カウンターパートから発表を行い、環境工学に係る知識を習得している。また専門家に相談する貴重な機会ともなっている。

（Mr. Horvath）訪日研修では日本の高度な知識を習得することが出来た。大気汚染対策、環境モニタリングシステムや機材の使用に関して有効だった。また日本の環境保護に関する資料も多く入手でき、役に立っている。研修の成果はJICAの帰国研修員同窓会でも発表を行った。

（Mr. Jenei）安藤短期専門家にISO14000に関する技術移転をDr. Kovatsとともに集中的にうけた。同分野の総合的な知識を習得することが出来た。

（Dr. Kovats）工場の環境技師としては極めて有益な知識であり、意見交換も行うことが出来て有益であった。

(Mr. Horvath) 大気汚染関係では山本・兼保両専門家が2週間活動し、大変興味深い講義を受け、資料も頂くことが出来た。またセミナーにおいてプレゼンテーションも行っていただいた。もう少し活動期間が長ければ良かったと思う。

(Ms. Havellant) ドナウイヴァー口シュ市周辺の環境問題の研究をしている。現在論文を執筆中。大気汚染が一番大きな課題となっている。研究には市役所の環境技師である Mr. Petrovickij からデータの提供など協力を得ている。

成果2 (カリキュラム作成) について

カリキュラムの作成は今後取り組んでいくべき課題。どの分野を組み合わせで新しいカリキュラムを作るか。これから埋めていかなければならない。最終的には各 C/P がそれぞれの分野で、講義と実習などのバランスを考慮し、作成すべきものと認識している。

成果3 (教材と機材の整備) について

機材は順調に整いつつある。既に活用しているものもあるが、最近導入された機材はこれから専門家から指導を受ける予定である。今現在も C/P のひとりである Mr. Hajos がブダペストにて機材の業者から使用法に関する研修を受けているところである。

教材については、これから作成されることになるだろう。

成果4 (ドナフェル社における OJT の実施) について

プロジェクトの1年間の間に工場のプロセスを数回見学し、現場を通じて環境問題の実状を理解することが出来た。プロジェクト2年目からは、ドナフェル社に限らず、産業界の環境問題調査をより活発に行う予定である。ドナフェル社とは非常によい協力関係を保っている。

成果5 (ハンガリーの環境問題関係者の環境問題に対する意識・理解の工場) について

プロジェクトは市の内外を問わず、積極的にセミナー活動を行ってきた。オーストリアからの講師を招いて、ごみの分別回収など先進国の事例を紹介も行っている。市民、NGO、ジャーナリストなどの参加も数十人単位で得られ、広く情報発信を行っている。ドナウイヴァー口シュ市でも C/P の Ms. Petrovickij を中心に、独自に環境教育プログラム (小学生対象、大人対象) を実施するに至っている。EU 加盟に向け、環境意識の向上に貢献している。

大内専門家インタビュー

1. C/P の育成状況

大学の C/P はもともと環境工学とは違うバックグラウンド（物理学、機械工学）であるが、次第に環境工学分野における専門性を高めつつあり、その成果をセミナーにおける講演で発表するに至っている。セミナーは環境保護の情報発信とともに、C/P の成果発表の場としても捉えている。悩みは C/P が大学の講義で忙しいこと。技術移転の時間は適宜専門家が見つけて指導しているほか（週 2 時間程度）、毎週水曜日の 16 時から 2 時間程度 C/P が集合し、専門家からの講義や情報交換を実施中。C/P は非常に熱心に取り組んでいる。自己研鑽できる時間が十分とれていないことが唯一の問題点か。

2. カリキュラムの作成

現在 Kiss 学長と方向性について協議を進めている。若干お互いのコンセプトの違いがあり、Kiss 学長はより Practical なすぐに役に立つ知識を、自信は実践的技術に限らず広い視野を持ちうる人材の育成に重点を置きたいと考えている。プロジェクト 2 年目からは特に C/P の実際の産業環境汚染に対する関心を高めるべく、企業や工場の視察を積極的に行う予定。カリキュラムの構築はそれまでの蓄積のもと、C/P の自主性を促す形で仕上げていきたい。カリキュラムは常に改善されるべきものであり、完結するものではないが、メインコースの発足に合わせてそれなりのものは仕上げなければならないと認識。

3. 教材の整備

教材とは認定を受けて製本されるような教科書という意味ではなく、実際の技術指導に必要となる資料などのことである。現在も各種使用中。

4. 環境技術者育成の目標数

環境工学サブコースが 2 年前に発足したばかりであり、コースの卒業生は去年 1 名、今年 3 名、来年は 10 名程度となる見込み。10 年後には年間 30～40 名の卒業生を排出することが現段階では妥当な目標といえる。EU 加盟は法整備のみで承認されるため、加盟後は如何にしてそれを実施していくかが課題となる。そこに大学の位置づけがあるだろう。

5. メインコースとサブコースの違い

内容的にも充実し、必要な単位・時間数も大きく異なることとなるが、なにより多くの学生を受け入れる体制、学生を引きつける体制となることが一番の変化か。現在学生数が少ないのは内容的にも Attractive になり切れていないからであろう。

6. ドナフェル社の民営化問題

民営化、売却とともに操業停止となる部分も出てきうるが、ドナウイヴァー口シュ市民が国にどれだけプレッシャーを掛けるかにも依るだろう。ドナフェル社グループの中でも儲かっている企業もあるので、それほど大きな影響は予想していない。

ステアリングコミッティ (SC)

日時： 1 月 2 0 日 1 0 : 0 0 ~

場所：ドナウイヴァーロシュ工科大学

出席者：

(ハンガリー側) Dr. Kiss 学長、 Ms. Hebbey(交通経済省), Dr. Vago(交通経済省), Ms. Szovenyi
(環境省)

(日本側) 調査団員一同、大内専門家、久新専門家、水田専門家

会議要旨：

(Dr. Kiss) 今回の SC の目的、調査団の紹介、プロジェクトの概要を総括

(谷川) 学長のご紹介に感謝。ミニッツ案に基づき、今回の調査結果を説明。

(Ms. Szovenyi) よくまとまっている。Gyor のセミナーは多数の参加者の交流を実現したという意味で特に有益な活動だったと思う。メインコースは 2003 年 9 月に発足する予定か？ また、SC にドナフェル社からの参加者を呼ぶことは難しいか？

(Kiss) メインコースは 2003 年 9 月に発足を予定している。ドナフェル社は現在難しい時期に来ており、SC への参加は難しいだろう。

(Ms. Hebbey) 非常によいプロジェクトとなっている。経済交通省としては今後 Transportation における環境汚染やクリーナープロダクションの分野における活動に期待したい。今後もプロジェクトの動向を注視していくつもりである。

(Dr. Vago) EU 加盟に向かい課題を抱える企業はドナフェル社だけでない。環境問題を抱える中小企業にまでプロジェクトの裨益効果が広がるよう期待したい。もっと多くの企業、学生、環境技術者が環境問題をより強く意識すべきであり、プロジェクトの今後の重要性はさらに増えよう。省のレポートに今後の環境教育に対する期待が述べてあるので、今後参考にさせていただき、意見も頂きたい。

(Kiss) 科学の日のオープンキャンパスには中小企業経営者も参加していた。卒業生の中にも企業で活躍しているものもいる。

※評価の結果、PDM の改訂に対して、特に関係者からの異論はなく、ほぼ案のとおり受け入れられた。

ドナウイヴァーロシュ市長表敬

日時：１月２０日 １４：００～

場所：ドナウイヴァーロシュ市役所

出席者：

(ハンガリー側) Dr. Andras Kalma 市長、Dr. Kiss 学長、Ms. Petrovickij

(日本側) 調査団員一同、大内専門家、久新専門家、水田専門家

会議要旨：

(Kiss 学長) プロジェクトの概要を説明。

(谷川) 今回の調査の説明。評価の結果良好。大学の協力が多大。プロジェクトの特徴としてはドナフェル社、市役所との協力が挙げられる。プロジェクトは残り２年。今後ご協力賜りたい。

(Dr. Kalman 市長) 環境保護は市にとって大きな問題。これまで環境に対する配慮が十分でなかった。長い年月を掛けて地道に取り組むべき課題と認識。日本の支援のもと協力が拡大することを希望。市の環境担当も熱心に取り組んでいる。産業界のみならず公共の問題として今後環境保護は重要。ド工科大も市内において重要な位置を占めており、今後も発展していくだろう。環境保護活動の中心として期待している。JICA 小山専門家の下請け企業家育成計画も始まっており、様々な面で日本の協力を望んでいる。C/P の Ms. Petrovickij の訪日研修に関しても支援するつもり。プロジェクトのオープニングセレモニーにも参加した。

(谷川) ご協力に感謝。

１４：３０～

Dr. Toth Istvan (環境) 管理部長との協議

(谷川) 今回の目的、プロジェクトの概要、これまでの協力に対する感謝。

(Dr. Toth) 環境問題に関し、市の意志決定を行う部署である。現在市内には分別収集システムが整っていないが、現在の最大の課題であり、近い将来取り組む予定で現在準備中。プロジェクト専門家の協力をこの点でも得られたら良いと思っている。

(大内) Ms. Petrovickij を通じ、状況は聞いている。

(谷川) 市としてプロジェクトに対する期待は？

(Toth) 質・両の両面において人材の育成に期待。EU 加盟を控えて重要な教育内容となるだろう。

(水口) 市民セミナーに関する評価、お考えは？

(Toth)今のところはまだ単発的。もっと継続的に市民の関心を高められるような方法が必要と考えている。

(田森) 市で ISO14000 を取得することをお勧めしたい。

(Toth) ISO9000 は既に取得済みである。14000 はこれからの目標の一つ。TQM が重要な要素である。

ドナフェル本社副社長との面談

日時： 1 月 2 0 日 1 4 : 0 0 〜

場所：ドナウイヴァーロシュ市役所

出席者：

(ハンガリー側) Mr. Szabo 副社長、Mr. Barna 技師長、Dr. Kiss 学長

(日本側) 調査団員一同、大内専門家、水田専門家

会議要旨：

(Kiss 学長) プロジェクトの概要を説明。

(Mr. Szabo) 歓迎。環境汚染は登社としても重要な課題と認識。

(Mr. Barna) Kiss 学長にはいつもご協力を頂いている。工場見学にも同行してご説明したい。

(谷川) 日頃よりのご協力に感謝。ドナフェル関係の支社からも C/P の提供を頂いている。また社内における OJT に対する協力についてもよろしくお願いしたい。

以 上

DEED(Development of Environmental Education in Dunaujvaros)
「ドナウーイヴァロシエ科大学における環境技術者人材育成」に係る供与機材設置計画（携行機材、本邦調達）

品名	単価(1,000円)	個数	実施計画時期			実施状況		
			H13年度	H14年度	H15年度	H13年度	H14年度	H15年度
大気/エネルギー関係								
1.排ガス前処理装置	1400	1	→	Feb-02				
2.燃焼排ガス分析計	300	1	→	Feb-02		○		
3.湿度/温度計	70	1	→	Feb-02		○		
4.Gas flowmeter(ピトー管)	85	1	→	Feb-02		○		
5.Tester(汎用形マルチ電力計)	700	1	→	Feb-02		○		
水質関係								
1.Pure water producer	1050	1	→	Feb-02		○		
2.Educational apparatus (ポンプデスター)	450	1	→	Feb-02		○		
(ジャーデスター)	320	1	→	Feb-02		○		
3.pH Meter	185	1	→	Feb-02		○		
4.TOC分析計	4,100	1		→			○	
騒音/振動関係								
1. 騒音計	150	1	→	Feb-02		○		
2. 振動計	350	1	→	Feb-02		○		
3. 周波数解析装置	1,200	1	→	Feb-02		○		
計器共通								
1.データ処理装置								
(パソコン)	300	3	→	Feb-02		○		
(プリンター)	50	2	→	Feb-02		○		
(スキャナー)	20	1	→	Feb-02		○		
2.ビデオカメラ	250	1	→	Feb-02		○		
書籍								
各種	500		→	2-Feb		○		
総計	12130					8030	4100	

(2003年1月現在)

DEED(Development of Environmental Education in Dunaujvaros)
「ドナウイヴァーロシュ工科大学における環境技術者人材育成」に係る供与機材設置計画（現地調達）

品名	単価(1,000円)	個数	設置時期			実施時期計画			実施状況		
			H13年度	H14年度	H15年度	H13年度	H14年度	H15年度	H14年度	H15年度	H15年度
大気/エネルギー関係											
1.Gas chromatograph with Mass	9,000	1	Jan. 2003	→					○		
3.Educational apparatus											
燃焼解析装置	1,500	1	Feb. 2003	→					○		
電力削減システム	600	1	Mar. 2003	→					○		
風式および振動式廃棄物分別装置	900	1	Feb. 2003	→					○		
水質関係											
2.原子吸光分析装置	3,750	1	Feb. 2003	→					○		
3.Educational apparatus											
凝集沈殿装置試作	1,550	1	Mar. 2003	→					○		
活性汚泥装置試作	1,000	1	Mar. 2003	→					○		
排水中和装置試作	800	1	Mar. 2003	→					○		
4.付属パーツ	未定				→						予定
計器共通											
基礎機材											
1.デジタルプロジェクター	600	1	Feb. 2003	→					見積中		
2.浮遊粒子状物質測定装置	700	1	Mar. 2003	→					見積中		
3.試薬、標準ガス等	1500		Mar.2003	→					見積中		
4.電気炉、ボート、トランス等	1500		Mar.2003	→					見積中		
5.蒸留装置、濾紙等	1500		Mar.2003	→					見積中		
6.Vacuum Pump等	1500		Mar.2003	→					見積中		
7.Others											
ルックスメーター	100	1			→						予定
サンプリング調整器具(大気・土壌)	500	2			→						予定
携帯式赤外線放射温度計	250	1			→						予定
ガラス細工具	150	1			→						予定
総計	27400										

(2003年1月現在)